

# IIAS NEWSLETTER

2001年6月発行

## 国際高等研究所

関西文化学術研究都市



国際高等研究所は、「人類の未来と幸福のために何を研究すべきか」を研究することを基本理念として、新たな学問の創造・進展を目指す「課題探索型」の基礎研究を行っています。

すなわち、人類の未来と幸福にとって不可欠な課題を発掘し、その問題解決に向かっての研究戦略を展開する中で、学術研究における新しい研究の萌芽、或いは新たな学問の立ち上げにより広く世界文化の発展に寄与することを目的としています。

### 目次

公開シンポジウム『男・女：性の在り方の未来像』開催報告

春のサイエンススクール

掲示板：春の叙勲受賞者、今後の予定

## IIASフェロー公開シンポジウム開催報告（2001年2月24日）

### 「男・女：性の在り方の未来像」：星野一正（京都大学名誉教授）

性同一性障害がクローズアップされるなど男性、女性という性のあり方が揺れている。これからの性はどうなっていくのかを考える高等研の公開シンポジウム「男・女：性の在り方の未来像」が2月24日、高等研レクチャーホールで開かれた。「男と女」という性に関して医学、社会学、生命倫理学や法学など多様な側面から討議され、「男女」という概念自体が問い直されるべき」「性別は自らが決めるものではないか」など新しい考え方も提起された。

高等研で進められている「21世紀の性の在り方の未来像 - 分子遺伝学的・生命科学的・医学的・人文社会科学的・実践倫理的・法的な総合研究」研究班の代表、医師で生命倫理学者の星野一正・京都大学名誉教授がイントロダクションとして、自らの経験も交えながら、なぜ、このような研究班をスタートさせたか、次のような話をした。

#### 男と女という性別二分法は必要か？

13歳で卵巣摘出され、性成熟が遅く、乳房も膨らまず、乳汁も出ない女性に対するホルモン療法を行った経験がある。女性のたっでの願いで、まだホルモン療法が一般的には認められていない時期に実施したが、その女性のQOL (Quality of Life) は満足させられた。このときの経験や、割礼手術の失敗

から性転換手術をされ、女性として育てられたが、女性であることに違和感を覚え、男性へと戻してもらい幸福になった実例などから、本人が望む性を満足させるための支援はしなければならないと考えようになった。

性同一性障害において、日本でもやっと性転換手術が認められるようになったが、法的、社会的にはまだまだ「男と女」という性別二分法が当たり前の状況だ。

1990年代に急速な進歩による遺伝子の解析や脳科学や内分泌学の新知見によって、性を決定する遺伝子や男女における脳機能の違いなどが明らかにされつつあり、外見だけでは男とか女と識別

できないことのあることも明らかになってきている。また、社会科学の分野ではジェンダー研究が進み、男女の性差は社会的に作られたものであるとの



考え方が一般的になってきた。

性別に関してはこのような状況にあるにもかかわらず、日本の法律では生後2週間以内に戸籍上の男女を決めなければいけないなど男女の区別を明確にすることが普通になっている。しかし、これからは性別によって差別されることもなく、一人の人間として尊重されるべき時代になると思われる。そのような時代における性はどうかを多方面から考える必要があるのではないかと、このプロジェクトは始まった。

基調講演として、日本で初めて性同一性障害に悩む人の性転換手術を行った埼玉医科大学の神経精神科、山内俊雄教授（副学長）が「性同一性障害を通してみた性のあり方」をテーマに医学的な立場から、また、先鋭的なジェンダー研究で知られる上野千鶴子・東京大学大学院人文社会科学系研究科教授が「セックス/ジェンダー/セクシュアリティ」と題して、社会学的にみた男女の性について話した。

### 性のあり方は多様で、性を決定する因子も多様

山内副学長は性同一性障害の人たちの調査や診療などから分かってきたヒトの性を決定する要因について報告した。



生物学的な性に関しては、遺伝子によって決まると考えることが多く、性決定遺伝子の研究もかなり進んできている。そして、性の自己意識が完成されるのが1歳半ごろとされているが、それを決定する因子は多様であるといわれている。

性同一性障害は生物学的な性（sex）と性の自己意識あるいは自己認知（gender）が一致しない状況で、生物学的に女性でいながら、乳房や月経に嫌悪を感じ、男性性器を持ちたいと望み、服装や行動、言葉づかいも男性として振舞うようになる。

一方、これまでの調査から、女性が自分の性に違和感を覚えるほうが、男性の性同一性障害より発症も早く、確定的で診断もしやすい。そして、genderは深く人間のアイデンティティにかかわっており、性同一性障害の人たちもアイデンティティの喪失感に悩んでいる。

Genderは脳の構造と深くかかわりあっていることも分かってきた。脳の分界条床核の体積によって男性と女性の違いがある。男性が大きく、女性が小さ

くなっており、男性の同性愛者は一般の男性より大きく、女性性に転換したい男性は女性より小さいことも明らかになってきている。

また、脳の働きは性ホルモンに影響され、女性から男性への性転換希望者に男性ホルモンを投与すると、いわゆる男性らしい攻撃性や性衝動が強くなり、言語の流暢性などいわゆる女性らしさは弱まってしまふ。さらに、胎児期に子宮内で男性ホルモンをどれだけ浴びるかによってもgenderに違いのことも証明されつつある。このように、脳の構造や機能によって性差が出てくる。

しかし、性差は遺伝子や脳の構造、機能だけではなく、社会的、文化的な要因も大きく影響している。これらの要因が絡み合って、性には男性、女性だけでなく、女性になりたい男性、男性になりたい女性など多様性がある。それゆえに性は男性、女性という単純な二分割では決めることができない。

### 男・女という概念を超えることが課題

上野教授は性にはセックスとジェンダー、セクシュアリティの3種類があり、セックスは生物学的な性であり、古典的な性ともいえる。一方、ジェンダーはフ

ェミニズム運動の産物でもあり、セクシュアリティは性科学の解放とともにクローズアップされ、両者とも社会的、文化的な性であるとして、これからの性のあり方を考えさせた。

セックスは「おちんちん」のある無しで決められていたが、フェミニズム運動と並行して、社会文化的な性差であるジェンダーという概念が登場してきた。ジェンダーは性自認であり、遺伝子、ホルモンや解剖学的な要素では決まらない。ジェンダーは社会的、文化的要因で決まるが、決まる時期は言語形成期と言われていた。しかし、現在ではその臨界期がなくなっているようだ。性同一性障害も性自認の問題であり、臨界期がなくなってきた現われともいえ、「障害」と呼ぶのはジェンダー論からは是とされない。そして、外科的な手術が認められるようになり、ジェンダーをセックスにあわせるより、ジェンダーにセックスをあわせるほうが容易と考えられるようになってきた。

また、性科学が一般に認められだし、これまでは

秘密にされていた性行為が明らかになってきた。他者との身体的性的関係がセクシュアリティだが、自己の身体としか性的関係を結べないセクシュアリティもあることも認められるようになり、セクシュアリティにおける男女はほとんど意味をなさなくなっている。それゆえに、ジェンダーとセクシュアリティは社会的、文化的な問題である。

男と女という概念は、生物学的な男と女しか考えられなかった時代に生まれたものであり、ジェンダー、セクシュアリティの研究が進み、これからの時代はこの古典的な概念を超える必要のあることが明確になっている。

### 生物のセックスはプログラムされている

シンポジウムでは、新井康允・順天堂大学名誉教授（人間総合大学教授）が、脳の機能や構造から性差が決まり、特に胎児期の子宮内での男性ホルモン



パネルディスカッション中の先生方  
（左から東優子、大島俊之、石原明、日高敏隆、新井康允、上野千鶴子、山内俊雄、星野一正先生）

がセックスに大きく影響を与え、性ホルモンがジェンダーにも関与しているとした。日高敏隆・滋賀県立大学長（京都大学名誉教授）は、動物行動学者として、自然界では子孫を残すために雄と雌があり、生物学的に性はプログラムされており、そのプログラムがなんらかの要因で発動されて、男性、女性が決まると話した。

### 法的にも性別の変更を認める必要が

石原明・神戸学院大学法学部教授は日本の法律では、戸籍上の名前の変更は認められるものの、今のところ、性別についてはできないことになっており、戸籍を届けるときの錯誤や人権を著しく侵害する場面に限り認められる可能性があるとした。

大島俊之・神戸学院大学法学部教授は、海外において、性同一性障害者の性別の変更、訂正はどうなっているかを報告。スウェーデンやドイツ、イタリアなど欧米各国では人権上の立場から訂正が認められてきており、大島、石原教授も日本でも認める方向にすべきだとした。

東優子・ノートルダム清心女子大学助教授は性科学者として、性同一性障害は精神疾患なのかとの疑問を呈した。そのうえで、性について語る事が抑圧されていたために性別が必要となったのであって、この抑圧を取り払うことで、セックスやジェンダーの壁もなくなっていくのではないかとした。そのためにも、性の科学的な情報を正確に伝えていく必要がある。（文責・事務局）

## 春のサイエンススクールを開催

けいはんなベテランズサークルと高等研の共催で、4月21日(土)に高等研コミュニティホールと前庭に面したテラスを会場として、小・中学生を対象とした「自然科学体験講座・宇宙ロケットはどのようにして飛ぶのか」が開催された。参加者は保護者を含めて約15名。

日本航空宇宙学会会長の久保田弘敏・東京大学教授から、宇宙ロケットはどのようにして空気のない宇宙空間を飛ぶことができるのか、未来の宇宙旅行はどのようになるのかなど話を聞いた後、高橋克忠・大阪府立大学教授をはじめとするけいはんなベテランズサークルの方々の指導で、ペットボトルを使った水ロケットを作成し、テラスから打ち上げた。打ち上げられたロケットの中には、高等研の庭を越え、隣のRITEの庭まで飛んだものもあり、子供達の歓声が響いた。

（文責・事務局）



## 春の叙勲受章者

勲三等旭日中綬章

・吉沢 尚明  
(京都大学名誉教授・高等研学術参与)

本年度「春の叙勲」受章者の高等研関係者は右記のとおりです。

## 今後の予定 (会場は原則として高等研) 2001年6月～2001年8月

月 日	プロジェクト名	研究代表者 / 講演者
6月2日(土)	「臨床哲学の可能性 - 生命環境の諸問題を軸として -」第11回研究会	野家啓一 (企画委員/東北大学文学部教授)
6月9日(土) ～ 10日(日)	「法観念の比較文化論」第3回研究会 (課題研究B)	上山安敏 (企画委員/京都大学名誉教授)
6月23日(土)	「IIASフェロー研究会」第2回研究会 岩田研究会「スキルの科学」	岩田一明 (IIASフェロー/大阪大学・神戸大学名誉教授)
6月29日(金) ～ 30日(土)	「思考の脳内メカニズムに関する総合的検討」第1回研究会	波多野諄余夫 (放送大学教授)
7月6日(金) ～ 7日(土)	「量子解析と量子情報論の数理」研究会	飛田武幸 (特別委員/名古屋大学名誉教授)
7月12日(木)	「IIASフェロー研究会」第1回研究会 岩田フェロー研究会	岩田一明 (IIASフェロー/大阪大学・神戸大学名誉教授)
7月17日(火)	「IIASフェロー研究会」第3回研究会 岩田研究会「スキルの科学」	岩田一明 (IIASフェロー/大阪大学・神戸大学名誉教授)
7月18日(水) ～ 19日(木)	「『一つの世界』の成立とその条件 - 鎖国時代の日本とヨーロッパ -」第7回研究会 (課題研究A) 2001年度第2回	中川久定 (国際高等研究所副所長)
7月24日(火)	「情報市場における近未来の法モデル」研究会	北川善太郎 (国際高等研究所副所長)
7月27日(金) ～ 28日(土)	「高度情報化社会の未来学」第6回研究会	坂井利之 (特別委員/京都大学名誉教授)
7月31日(火)	「IIASフェロー研究会」第4回研究会 岩田研究会「スキルの科学」	岩田一明 (IIASフェロー/大阪大学・神戸大学名誉教授)
8月3日(金) ～ 10日(金)	「京都大学数理解析研究所との共同研究」国際シンポジウム Algebraic Geometry in East Asia 東アジアの代数幾何	白井三平 (大阪大学大学院理学研究科教授)
8月4日(土)	「臨床哲学の可能性 - 生命環境の諸問題を軸として -」第12回研究会	野家啓一 (企画委員/東北大学文学部教授)
8月17日(金) ～ 27日(月)	「多様性の起源と維持のメカニズム - 多様性・乱雑性の新しい理解を目指して -」第4回ワークショップ(サマーセミナー) (グループA)	吉田善章 (特別委員/東京大学大学院新領域創成科学研究科教授)
8月18日(土)	「IIASフェロー研究会」第5回研究会 岩田研究会「スキルの科学」	岩田一明 (IIASフェロー/大阪大学・神戸大学名誉教授)
8月31日(金)	「IIASフェロー研究会」第6回研究会 岩田研究会「スキルの科学」	岩田一明 (IIASフェロー/大阪大学・神戸大学名誉教授)

お問い合わせ

国際高等研究所



International Institute for Advanced Studies

編集・発行 / 国際高等研究所

〒619-0225 京都府相楽郡木津町木津川台9-3

TEL: 0774-73-4001 FAX: 0774-73-4005

http://www.iias.or.jp/ e-mail: www\_admin@iias.or.jp